

二 現代かなづかいの生かし方

(昭和二十二年八月)

文部省内国語問題研究会

単行本「新しい文書の手びき」(昭和二十二年八月刊)の第五章として書かれたもの。四つ仮名とオ列の長音については、語例を網羅して特に詳しく解説している。

一 現代かなづかいのできたわけ

われわれが文書をかく場合、普通に用いる形式は漢字かなまじり文といわれています。漢字とかなとのうち、漢字については、前の章でその使い方を書きましたから、この章では、かなの使い方について少し説明しましょう。

これから当用漢字表にある漢字だけを使って文書を書くことになると、いきおい、今まで漢字で書いていた言葉も、かなを用いて書かなければならない場合がでてきます。また、文字の用法の改革は文字の面だけにとどまるのではなく、漢字を無制限に使うことが許されないために、いきおい、むずかしい表現ができなくなり、やさしいことばを選んで文書がつづ

られるようになるのはいうまでもありません。そのためにも、また、文書のなかにながきの部分がふえてくるものと考えられます。かなづかいの問題は、いままでとは比較にならないほど重要な意味をもってきたのです。このような時にあって、いままでのかなづかいにかわって、現代かなづかいが制定され、実行にうつされました。では、何のためにそのような処置がとられたのでしょうか。かなの使い方の変革のうちに見られる精神は、同時に、そのかなを用いて文書を書く人々の心構の問題ともかかわりがあると考えますから、簡単にその点にもふれながら、筆をすすめて行きましょう。

かなづかいには歴史的かなづかいと表音的かなづかいとの二つの型があって、いままでのかなづかいには前者に、現代かなづかいは後者に属するということはいうまでもないことです。が、歴史的かなづかいもそのもとを正せば表音的かなづかいであったのです。年がたつにつれて、ことばの音が変わって行ったのに、そのことばをかなであらわす表記形式もとのままであったため、ことばと表記形式との間にへだたりができて、ちょうど、身だけはのびたのに着物は四つ身の着物そのままといった形になったのです。千年も前の表記形式で現代語をあらわそうとしたところに本質的に無理があったのです。それがまた、教育上の大きな負担にもなって、漢字を

多く教えることとあいまって、漢字やかなづかいを教えることと、その言いかえとに時間をとって、事物そのものの内容の教育にまで行かないうらみがありました。文字使用の平易化ということがいつも声を大にして叫ばれたのも主としてこの理由からです。ただに教育の面だけではなく、ひろく社会生活においても、今までのかなづかいが十分統一に行われていたわけではなく、その混乱と一般人にとっての困難さは、社会生活の能率をいちじるしく低下させていたのが、今までのいつわりのない状況だったのです。

現代かなづかいはこのような困難をのぞくために制定されたものですが、とくに、今までの漢字のかけにかくれて、露出していなかった困難が当用漢字の制定・実行にもなつて、大きくわれわれの前におどり出してきた時、現代かなづかいの必要性はとみに加わつたといつて過言ではないと思ひます。では、現代かなづかいはどんな内容のものなのでしょうか。

二 現代語音とちがう点

現代かなづかいは表音的かなづかいであるといわれています。現代かなづかひのまえがきにも、

このかなづかひは、大体、現代語音にもとづいて、現代

語をかなで書きあらわす場合の準則を示したものである。

と述べられています。それではこのかなづかひは現代語音をそのままあらわしているのかというと、けつしてそうではないのです。現代語音をそのままあらわしたものとすれば、発音符号が考えられます。それらは、正字法の一つとしてのかなづかひとは性質のことなつたものです。現代かなづかひは傾向として表音的ではありませんが、あらわそうとすることは音韻と、それをあらわす文字として採りあげられたかなとの間にはある約束が介在するのです。その約束が現代かなづかひの内容なのです。約束である以上、その約束を知らなければ、——またこれを習わなければ、使うことはできません。ところが、現代かなづかひの条文のいちいち、旧かなづかひとどのようにちがうかという点を明らかにしようという意図からして、説明がややこみいつています。その条文は巻末に収めてありますから、それを見ていただくことにしますが、それを見やすいように一つの表にまとめてみると、次のようになります。